

延慶元年（1308年）、後醍醐天皇（当時はまだ天皇ではない）の皇子として生まれた。

6歳の頃、尊雲法親王として、天台宗三門跡の一つである梶井門跡三千院に入院した[1]。大塔宮と呼ばれたのは、東山岡崎の法勝寺九重塔（大塔）周辺に門室を置いたとみられることからである。

正中2年（1325年）には門跡を継承し、門主となる。後醍醐天皇の画策で、嘉暦2年（1327年）12月から元徳元年（1329年）2月までと同年12月から元徳2年（1330年）4月までの2度にわたり天台座主となる。

『太平記』によると、武芸を好み、日頃から自ら鍛練を積む極めて例がない座主であったという。

『護良親王出陣図』

元弘元年（1331年）、後醍醐天皇が2度目の鎌倉幕府討幕運動である元弘の乱を起こすと、還俗して参戦する。

以後、令旨を発して反幕勢力を募り、赤松則祐、村上義光らとともに十津川、吉野、高野山などを転々として2年にわたり幕府軍と戦い続け、京都の六波羅探題を滅ぼした。

しかし、討幕の功労者足利尊氏（高氏）とは相容れず、討幕後も上洛せず信貴山（奈良県生駒郡平群町）を拠点に尊氏を牽制した。

鎌倉幕府滅亡後に後醍醐天皇により開始された建武の新政で、護良親王は征夷大將軍、兵部卿に任じられて上洛し、尊氏は鎮守府將軍となった。建武政権においても尊氏らを警戒していたとされ、縁戚関係にある北畠親房とともに、東北地方支配を目的に、義良親王（後の後村上天皇）を長とし、親房の子の北畠顕家を陸奥守に任じて補佐させる形の陸奥將軍府設置を進言して実現させた[2]。

『太平記』によると、尊氏のほか、父の後醍醐天皇やその寵姫阿野廉子と反目し、尊氏暗殺のために配下の僧兵を集めて辻斬りを働いたりした。このため、征夷大將軍を解任され、建武元年（1334年）冬、皇位篡奪を企てたとして、後醍醐天皇の意を受けた名和長年、結城親光らに捕らえられる。その上で足利方に身柄を預けられて鎌倉へ送られ、鎌倉將軍府にあった尊氏の弟足利直義の監視下に置かれたと述べている。

その一方、『梅松論』では、兵部卿の護良親王は、父・後醍醐天皇の密命を受けて、新田義貞、楠木正成、赤松則村とともに、尊氏を討つ計画を企てた。しかし、尊氏の実力になかなか手を出せずにいた。建武元年（1334年）夏に、状況が変わらないことに我慢がならなくなった護良親王は、令旨を発して兵を集めて尊氏討伐を起こした。これを聞いた尊氏も兵を集めて、備えた。その上、尊氏は親王の令旨を証拠として、後醍醐天皇に謁見した。これを聞いた後醍醐天皇は「これは、親王の独断でやったことで、朕には預かりは知らぬことである」と発言して、護良親王を捕らえて尊氏に引き渡したと述べている。

いずれにせよ父・後醍醐天皇との不和は、討幕戦争の際に討幕の綸旨を出した天皇を差し置いて令旨を発したことに始まると言われ、皇位篡奪は濡れ衣であると考えられている。失脚の前兆として護良親王派の赤松円心の勢力の著しい削減があった。

翌年、北条時行を奉じた諏訪頼重による中先代の乱が起き、関東各地で足利軍が北条軍に敗れると、二階堂ヶ谷の東光寺に幽閉されていた護良親王は、頼重らに奉じられる事を警戒した直義の命を受けた淵辺義博によって殺害された。護良親王は前征夷大將軍であり、親王が時行に擁立された場合には宮將軍・護良親王一執権・北条時行による鎌倉幕府復活が図られることが予想されたためであり、一方で鎌倉に置かれていた成良親王は京都に無事送り届けられていることから、直義による護良親王殺害は問題とされることはなかったとみられている。親王殺害の2日後に鎌倉は北条軍によって陥落した[3]。

護良親王墓

前述の『太平記』では、東光寺の土で壁を固めた牢に閉じ込められたことになっており（土牢は鎌倉宮敷地内に復元されたものが現存）、直義の家臣・淵辺義博に殺害されて、首を刎ねられた護良親王は、側室である藤原保藤の娘の南方に吊われたと伝えられている。南方と護良親王とのあいだには鎌倉の妙法寺を開いた日叡が生まれ、後に父母の菩提を弔った。さらに護良親王の妹が後醍醐天皇の命をうけて、北鎌倉にある東慶寺の5代目の尼として入り、用堂尼と呼ばれた。東慶寺には護良親王の幼名「尊雲法親王」が書かれた位牌が祀られている。

宮内庁が管理する墓所は神奈川県鎌倉市二階堂の理智光寺跡で、妙法寺にも墓がある。